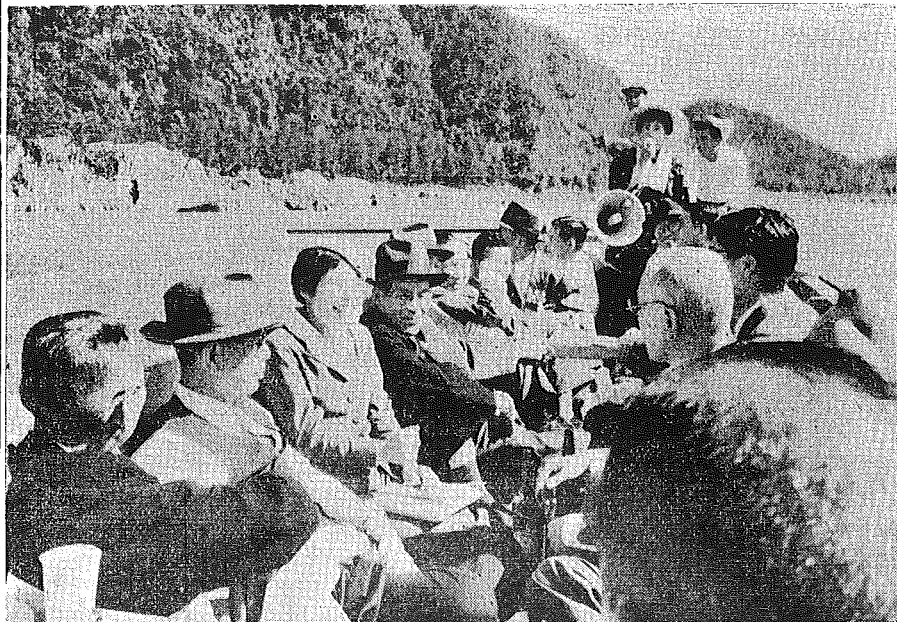


洛友会々報

京都市左京区吉田
京都大学工学部
電気科教室内
洛友会



本部総会の前奏曲として日本ライン下りがあつた。天気は上々、老いも若きも艇舟に身を託し、リバーガイドガールの美声に心を預け、浮世離れて萬々歳。木曾川の水は何んのか、わりもないが、何故か人里へ急いで流れ、岩を蹴り、河底の石を跳ね飛ばしてゆく。洛友会員は、たゞ楽しさ嬉しさに融け合つていた。

第五回 洛友会総会記録

午後六時より城山荘広間において、工藤幹事司会の下に開かれた。鳥養会長が議長席につき開会の挨拶があつて議事に入り、山村幹事より前年度事務報告並に会計報告(別項)あり、これを承認し次いで昭和卅一年度予算案の審議をなし、満場の拍手裡にこれを可決した。
次に役員の変更は議長指名による。詮衡委員五名が選ばれ、別室にて協議の結果、役員は全部重任となし、新たに副会長に清水勲二氏を推薦することになつたと同委員長乙葉真一氏より報告、議長これを議場に諮り拍手裡に決定した。
次いで鳥養会長は現幹事は全部重任とし、新たに西枝一江、内田幸夫、上西亮二の三氏を幹事に指名追加された。
これを以て全部議了し、時に午後六時三十分。

総会出席者

鳥養会長

北海道支部
大塚 徳雄 大 6

東京支部
大西 冬藏 大 6
乙葉 真一 大 7
三谷 峰吉 大 13
石川 辰雄 大 15
藤田 真 6
正木 知巳 12

関西支部
上林 一雄 大 6
加藤 信義 大 7
藤田 誠治 大 12
上林 明 3
木村 章介 3
上西 亮二 6
中堀 孝志 10
井原九州男 12
中山 治郎 16

山村 忠行 大 6
工藤 寿男 大 7
西枝 一江 2
小池 恒久 3
伊藤 忠雄 5
松岡 重一 7
清野 泰之 12
大谷 泰之 13

久高 将吉 大 6
好徳 大 10
富永 和郎 大 14
交川 有昭 2
蒲生 朝郷 8

近藤 文治 大 18
大沢 謙一 29
中野 修三 大 45
清水 勲二 大 7
河津 吉兵衛 大 13
岡田 市治 大 14
田中 卓次 大 15
竹上 武雄 4
根本 一郎 6
小野 恒造 8
酒井 長武 8
河村 泰雄 9
川村 進 12
並木 博 18
伊藤 定昌 20
水野 勝巳 20
佐藤 彰洋 22
近藤 章 22
遠藤 直治 27
吹沢 直治 30

渡辺 義朗 大 30
飯塚 啓吾 28
川島 栄次郎 大 4
太田 誠平 大 11
庄野 誠一 大 12
本多 静雄 大 13
竹内 保大 14
伊達 達 4
古田 久一 6
富満 通哉 7
川端 太郎 8
坂本 忠久 9
伴 康 10
川内 幸彦 17
竹内 平一 19
菅沼 春幸 20
外山 敏夫 21
江口 潤 22
島田 洋一郎 22
三好 保憲 24
推薦 29

収入の部

自昭和三十年十月一日
至昭和三十一年三月卅一日 決算

本年度分 一五八、三〇〇
過年度分 一四〇、三〇〇
預金利子 一八、〇〇〇
雑収入 五、四九四
雑収入 九、五〇〇
繰越金 四二六、八七五
合計 六〇〇、一六九

支出の部
刊行物費 三〇三、三九四
名簿編集費 九、〇〇〇
同印刷費 一五九、〇〇〇
同印刷費 四七、六一三
同印刷費 五、九一三
同印刷費 三〇、一一〇
同印刷費 五一、七四八
同印刷費 一三四、一六一

諸品費 一五八、三〇〇
本年度分 一四〇、三〇〇
過年度分 一八、〇〇〇
預金利子 五、四九四
雑収入 九、五〇〇
繰越金 四二六、八七五
合計 六〇〇、一六九

昭和三十一年度決算報告
自昭和三十一年四月一日
至昭和卅二年三月卅一日

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

昭和三十一年度決算報告
自昭和三十一年四月一日
至昭和卅二年三月卅一日

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

昭和三十一年度決算報告

自昭和三十一年四月一日
至昭和卅二年三月卅一日

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

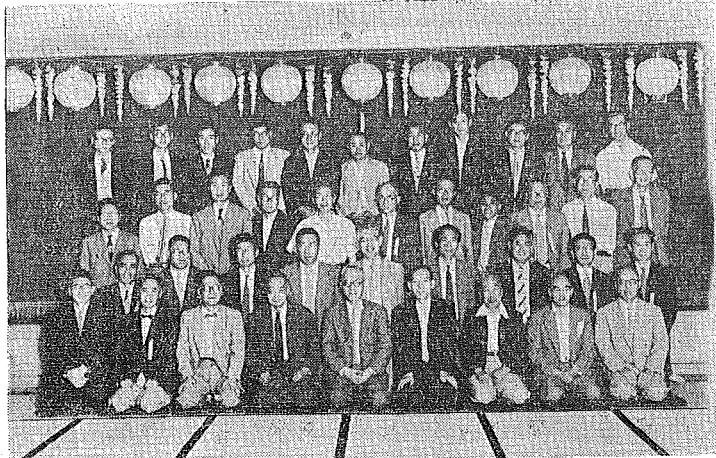
本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一

本年度分 四五一、七〇〇
過年度分 三七四、六〇〇
預金利子 七七、一〇〇
雑収入 八、一九七
雑収入 三二一、二五〇
雑収入 六一、〇〇〇
雑収入 一三七、九九四
繰越金 九二五、二四一



四国支部總會



九州支部總會



五三会関西クラス会

昭和28年卒(旧制)の関西在住者クラス会が恒例により1月5日武藤氏のお世話により国鉄京都職員宿泊所(ますや)で開かれた。参加者18名何れ劣らぬ斯道の大家とて酒も水もあらばこそ一座は大荒れに荒れてケリ。若き日の思い出(今でも若いですが)を新たにした。

り一同の顔が曇る。早速真偽の程が確かめられ計画を変更し関係先へ連絡する。やがて予定より約一時間遅れて関西本幹事一行を迎えて、ほく笑ましい挨拶が交され清水支部長、本多副支部長の案内で予て用意された二台の遊覧バスに乗車し一路、今渡のライン下りの出発点に向つた。途中田原神社前で臨時停車、人間の神秘の由来に打ち興じつゝ再び乗車、バスガイドの名案内振りに附近の名所旧跡を偲びつゝ今渡に着。こゝで用意された二隻のライン下りの船に乗り換え愈々記念行事のプラン日本ライン下りに入る。今

| | |
|-------|---------|
| 本年度分 | 四二〇、〇〇〇 |
| 過年度分 | 四五、〇〇〇 |
| 預金利息 | 六、〇〇〇 |
| 雑収入 | 一〇、〇〇〇 |
| 繰入金 | 二八一、九七八 |
| 繰越金 | 七六二、九七八 |
| 合計 | 七六二、九七八 |
| 支出の部 | |
| 刊行物費 | 四二二、〇〇〇 |
| 名簿編集費 | 一五、〇〇〇 |
| 同印刷費 | 一八〇、〇〇〇 |
| 同発送費 | 六五、〇〇〇 |
| 会報編集費 | 二、〇〇〇 |
| 同印刷費 | 六〇、〇〇〇 |
| 同発送費 | 一〇〇、〇〇〇 |
| 諸品費 | 二三〇、〇〇〇 |
| 備品費 | 一〇、〇〇〇 |
| 会費 | 一〇、〇〇〇 |
| 總會費 | 七〇、〇〇〇 |

| | |
|-------|---------|
| 会費集金費 | 二〇、〇〇〇 |
| 総掛費 | 六〇、〇〇〇 |
| 旅費 | 六〇、〇〇〇 |
| 臨時費 | 四〇、〇〇〇 |
| 懇話会補助 | 四〇、〇〇〇 |
| 予備費 | 七〇、九七八 |
| 合計 | 七六二、九七八 |

総会の記

第五回総会は前総会で約束された通り中部名古屋で開催される事となつた。中部名古屋の誇りとするものは何か？それは今や世界に誇る日本ラインと鶴岡である。これに配するに家元・西川流の踊りがある。今一つ洛友の皆さんに誇り得る先輩河津吉兵衛さんの専売特許、洛友福引がある。私ども中部支部の会員が遠来の洛友の皆さんを迎えるに当り、自らこれらのものに中心が向けられたのも宜なる哉と昔かされる事でしょう。清水中部支部長はこのプランの実行のため半年も前から準備おさおさ怠りなく衆智を集めて選ばれた日取りが六月三日である。

だが待望の六月三日も五月下旬より降り続く雨に晴雨、二道かけてのプランで進まなければならぬ運命に追いやられてつた。併し正に天運と言ふか夜来の豪雨も跡方なくやんで朝からほのかな太陽の輝く夢想たにもしなかつた絶好の行楽日和を迎える事が出来た。午前十時に地元洛友会員が清水支

洛友会を盛んに行ふ
しるべき事々々を盛んに行ふ
腰折れの一詩亭は流石に入るべし

宿而忽晴尾三天
東西快友上江船
快哉奔水舟履景
風滿坪山影影鮮

清水支部長の漢詩

度はパスの案内とは打つて變つて案内はカスリでのモンペ姿である。素朴で原始的な渡舟にはビタリと調和がとれて、お国なまりの説明も一しお風情を添える。

大瀨の瀬、鷺ヶ瀬、可児合、西の保瀬の急流に沫をあげつ、ビールの泡しぶきに舌敷をうつつ、水深くしてライオン岩は水中に没し觀賞の機会を逸したが、ラクダ岩、五色岩、メガネ岩、烏帽子岩の奇岩を目の当りに見て由緒あるアベツクはさま(アベツクでこの岩影に入ると人目を忍べる)に見入る。紺碧の七十尺の深淵、しんせきへきの淀む静けさに、うわばみの住家を偲び、やがて広漠たる桃太郎遊園に出る。こゝより大山橋河畔に高く眺め立つ城山荘、犬山城を真正面に眺めつ、城山荘の港に入る。舟から降りて深緑の木々の間を滝壺の露にぬれつ、一階待合所に至り、エレベータ

ーを待つ。定員僅か、七名の遅いエレベーターで、目ざす城山荘の会場に向う。併し出て見ると山の上である。今しがた下つてきた日本ライオンも一望千里、眼下に見える。

そよ風に肌を任せつ、高く聳える犬山城、その直下を流れる日本ライオン、眼下には犬山橋が見え、その上をおもちゃの電車を思わせる名鉄電車も走つて並んで、日本ライオンの澄んだ川すじと並んで二すじに長く続いた白い砂原がくつきりと浮び、遙か彼方には水と空と横糊として連なる廻り尾張富士の偉容が聳え、蓋し天下の絶景である。

総会の会場として城山荘が選ばれたのも又こゝにあつた次第である。やがて後段の第二班の到着を待つて個々に入浴を終り六時より総会に列なる。

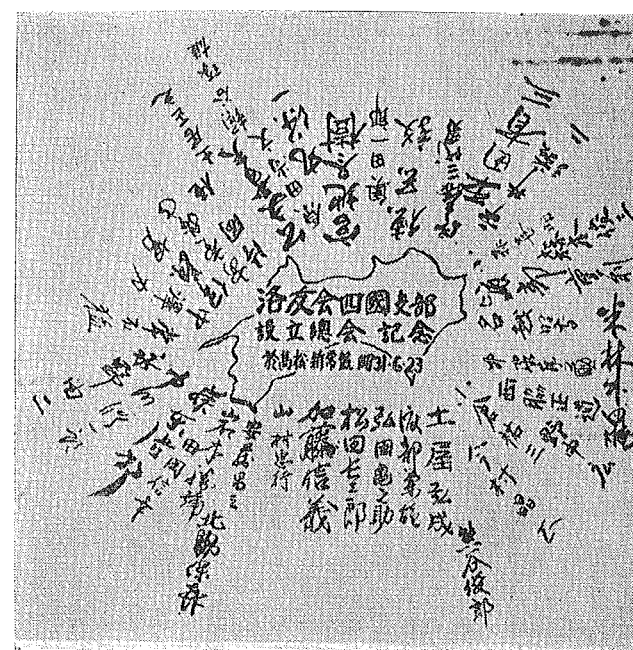
工藤幹事の司会で鳥養会長の挨拶、幹事の会計報告も、またく、間

にすませて今年度役員は全部留任と定まる。やがて予定の開宴となる。開宴に当り清水支部長挨拶に曰く「精進齋戒する事こゝに半歳有余、その甲斐あつてか夜来の雨もビタリと止んで今日のよき日を迎える事が出来ました。昨日から開かれる筈の鶴飼開きも本洛友会員の皆さん方のために今日に延ばさせました。(笑の処は雨で延びたのだが)又今日の皆さん方を歓迎する意味で橋のたもとで歓迎の音楽を奏で、います。これから歓迎の花火も打上げます」に拍手喝采、歓声は湧き総会気分はいやが上にも高調、鳥養会長の発声で乾杯、宴会に移る。

この頃より夜のとぼりは静かに下りて一面薄霧に包まれた中を直下の川面に万燈流しが始まる。赤々と燃える万燈が次々と流され、一条の線を引いて押し流されて行く。

やがて、かゞり火が炎々と燃え盛る中に鶴飼が始まる。皆が席を立てて暫しその絶景にみとれる。今度は下流の方に当つて耳をつんぎく花火の連発である。宴はまさに最高調に達した。この頃、本多副支部長、河津吉兵衛両氏の肝入りなる西川流の踊が始まる。西川みよこ、貞子兩名取の出演に皆が固唾をのんで暫しその妙技にみとれる。

続いて地元芸妓の犬山首頭に踊の幕を閉ちる頃、かねて磨き上げた腕の見せ頃も、こゝとばかり藤田誠治(大正十二年)先輩の春さめの飛入り演技の妙なる披露があつて拍手喝采の中に踊の幕を閉ち、漸くにして皆我れに返り盃を手にする。飲む程に酔う程に次々に盃はつきり交される。やがて待望の河津吉兵衛さん得意の妙技、洛友福引に移る。福引を引いた人が上の句を讀むと、下の句を河津さんが大声で口ずさみ、景品を渡すという仕組みであるが、この文句が洛友の皆さん方に關係があ



る中に鶴飼が始まる。皆が席を立てて暫しその絶景にみとれる。今度は下流の方に当つて耳をつんぎく花火の連発である。宴はまさに最高調に達した。この頃、本多副支部長、河津吉兵衛両氏の肝入りなる西川流の踊が始まる。西川みよこ、貞子兩名取の出演に皆が固唾をのんで暫しその妙技にみとれる。

続いて地元芸妓の犬山首頭に踊の幕を閉ちる頃、かねて磨き上げた腕の見せ頃も、こゝとばかり藤田誠治(大正十二年)先輩の春さめの飛入り演技の妙なる披露があつて拍手喝采の中に踊の幕を閉ち、漸くにして皆我れに返り盃を手にする。飲む程に酔う程に次々に盃はつきり交される。やがて待望の河津吉兵衛さん得意の妙技、洛友福引に移る。福引を引いた人が上の句を讀むと、下の句を河津さんが大声で口ずさみ、景品を渡すという仕組みであるが、この文句が洛友の皆さん方に關係があ

昭和三十一年五月九日
洛友会九州支部
第三回總會

会場：博多
情緒：水戸
「ゆたか」

和藤信義
神保成吉
熊谷三郎

出井 敬助
田中 安太郎
河野 清一
木村 勝太郎
山田 幸次
佐藤 信之
吉田 隆夫
伊藤 健一
鈴木 一郎
高橋 二郎
渡辺 三郎
山崎 四郎
佐々木 五郎
松本 六郎
石川 七郎
木村 八郎
清水 九郎
山崎 十郎
佐々木 十一郎
松本 十二郎
石川 十三郎
木村 十四郎
清水 十五郎
山崎 十六郎
佐々木 十七郎
松本 十八郎
石川 十九郎
木村 二十郎

G. Tanabe
N. Tanaka

るから面白い。一つ二つ拾つてみる
と「洛友会員と出て京大(京大)の電
氣という訳で兄弟が当る」「洛友会
の中部支部長と出て、しみーさん
でシミーズが当る」又「日本ライ
ン下りとしてぶきががかる早く拭い
てちようで、名古屋手拭が当る」と
いう訳で拍手喝采。酒とビールのカ
クテルの嵐の中に御本尊の河津さ
ん、汗ビツシヨリで一時間に近い熱
演ぶりで終了。かくて再び我れに返
つて盃の交換が始まる。

その中、或る一割で犬山音頭の稽
古が始まる。天下の犬山へ来たそ
の手土産に犬山音頭でも覚えて帰ら
うとする殊勝な御魂胆とも肯かれる。
遠来のお客様は御一泊される事と
なつていたが近県からの多数の地元
会員は帰りを思ひ、ゆつくりも出
来ず心残りを惜しむつ、帰り支度
に忙しい。九時頃よりポツポツ席が空
いて来る。併し宴は愈々盛んであ
る。いつ果てるとも判らないうちに
も次第に人数はまばらとなり、三十
一年度洛友会総会は終に幕を閉ぢる

事となつた。
翌日は又好天に恵まれ市内見物と
ゴルフ組の二つに分れ、市内見物で
河野NHK技術部管理課長の案内で
放送局、テレビ塔、東山公園と市内
見物し、ゴルフ組は東山のゴルフ場
で小野東海電気通信局長の案内で取
行われた。(川村進記)

四国・高松

松田長三郎

洛友会四国支部の発会式と電気・
照明両学会四国支部の講演会を兼ね
て、加藤教授・山村幹事と共に六月
廿三日、高松へ行きました。車中、
東京から帰られる愛媛大学の弘田さ
んと四人の楽しい船旅の旅でした。
宇高連絡の海上は曇つていました
が、まるで湖水を渡るような静かな
航海、こんな静かな海でどうして
一、五〇〇トンもある紫雲丸のよう
な事件が起つたかと怪しまれる位
でした。京都から六時間。着後早々
講演会、六時から発会式と懇親会
幹事の方々のお骨
折りにより高知・
新居浜・徳島の
他各地から卒業
生、教室に居られ
た方、旧講習所卒
業生の方々が来
会せられて盛大な
集りでありまし
た。大正四年御卒
業の安藤昌三さん
は四国配電理事を
御退任後は御郷里
で村長として郷党
のために御尽力で
したが、農地解放
当時、大地主であ
られた同氏の小作
人百二十人ばかり
ち御礼に來た

のは三人であつたとお話には心打
たれました。翌廿四日の日曜は宮地
冬樹さんの御案内で国立公園屋島の
観光をさせて頂いたのでケトルで約
五分。山上は平坦な観光道路、案内
嬢の説明に耳を傾けながら約二時
間の周遊は印象的でありました。到
るところ風光絶佳、在りし日の源平
の古戦場、檀の浦は脚下指呼の間に
あり、数百年前に満たぬ源氏勢に敗走
した平家没落の哀史は涙をそよも
のがある。歴史を修めぬ今の小・中
学生などにピンと、が合わぬらし
い。源義経をゲンゲキと読まれる
ようでは全く張り合いがなからうと
同情した。四国八十四番の札所にお
詣りした。今の若い人たちはお賽銭
を供えないと言ふ。これも時代の一
つの様相。
両支部長さんたちの屋簷の御招宴
の後、多数の人たちのお見送りを受
けて二時五分発の連絡船で帰途に就
いた。関係の各位、特に弘田・岩本
・渡辺・宮地・北脇等の諸氏に御礼
を申上ぐると共に四国支部の御発展
を祈ります。尚又、海底トンネルや
海峡横断送電線等の企画もあり、技
術界の発展も大いに期待せられてい
る。

北海道より

去る六月十一日、札幌在住者八
名、北電幌西クラブに会合、折しも
翌十二日札幌で九電力会社の工務部
長会議が開かれる前夜とあつて洛友
会員で遠路來道される方が数名あつ
たが、その中で荒井さん(北陸電力
取締役)に御出席頂けて一層楽しく
過ごすことが出来ましたことは感し
かったです。
会員の少ない当地方の如きは、こ
ういう全国的な会合が開かれる機会
を利用するのにも良案と考えます。
支部役員を今回次の如く改選。
(支部長) 小田部毅

北陸支部總會

北海道電気工事株式会社
(芝山記)

去る五月十九日(土)北陸支部總會
が新緑滴たる森の部、金沢において
開催されました。
金沢の市を流れる犀川の清流を
望み、犀川大橋にほど近き料亭かわ
新に定刻を過ぎること三十分、午後
五時には出席通知の殆んど全員が参
集せられ事務報告、会計報告と型通
り進み、新支部長として長井要蔵氏
(大正五年卒、立山開発KK)を全
員一致で推薦決定しました。
次に評議員に左記十名の方を満場
一致、喝采のもとに推薦しました。
尚幹事については
新支部長の決裁に
待つこととして、
總會議事を終了
し、直ちに懇親会
席に移りました。
(評議員) 佐伯光
太郎、荒井武治、
堀内多雄、金井久
兵衛、萩原博、石
川清、小柳美一、
鶴飼二郎、畔柳孫
一郎、竹下龜藏

遽馳せつけられた本部よりの大谷先
生、山村幹事をお迎えして座は急に
色めき立つた。大谷先生、山村幹事
より教室の現況、洛友会の活動状況
等の報告を受け会員一同は在京当時
の思い出にふける。そのうちに金
沢西原の綺麗どころの参加によつて
座はとみに活気付き、ちか子姐さん
とかの弾く三味の音に手踊り、山中
節等、北陸情緒の尽きぬまゝ、に会員
の隠し芸も飛び出して会は最高潮に
達したかと思ふが、富山方面に帰
らるゝ会員の列車の都合もあつて一
応寄せ書を終り、山村さんの音頭で
洛友会北陸支部の萬歳を三唱した。
その後もうしばらく進んでつた会員同志
の欲談、隠し芸もあつて、いつ果て
るとも見えぬうちに、最後に大谷先
生の纏着深き名講義があり、一同学
生気分に戻つて興味津々と受講、尽
きぬ心残りを惜しむつ、その日の会

洛友会
昭和三十一年六月十一日
高松市
松田長三郎
加藤教授
弘田さん
岩本さん
渡辺さん
宮地さん
北脇さん
荒井さん
畔柳さん
鶴飼さん
竹下さん
佐伯さん
堀内さん
金井さん
萩原さん
石川さん
小柳さん
小田部さん

新評議員佐伯光
太郎氏が当日欠席
の新支部長に代つ
て開会の辞を述べ
られて今後の会の
発展を祝福せらる
らうと、早くも酒
肴が運ばれ座が賑
わつて来る頃、列
車ゆの、めで急

山の幸
山本禮昌
日比谷いさ子
昭三
林一
五月十一日
高松市
洛友会
支部
総会
報告

を終りました。尚お当日の出席者は左の通りであります。

- (高木金生記)
犬10 佐伯光太郎 衣12 荒井 武治
昭2 堀内 多雄 昭3 野口 鍊雄
昭4 高木 金生 昭7 萩原 博
昭7 石川 清 昭7 西岡 敬二
昭7 長田 晋吾 昭8 増田 盛雄
昭9 篠原 一恭 昭13 藤宗 寛治
昭16 田中 信義 昭16 橘 勝
昭18 田辺 賢雄 昭22 岩本 市平
昭23 西村 尚和 昭28 村本 浩
昭29 平井 一正

四国支部創立總會

かねてより懸案となつておりました四国支部の発会式は本部より松田・加藤両先生、山村幹事をお迎えして六月廿三日、高松市常盤にて盛大に行われました。当日は熱帯性低気圧の襲来で南国特有な豪雨となりましたが、安藤・弘田・岩本先輩等の長老を初めとして四国在住会員五十二名中廿六名、更に講習所出身者及び教室関係者十一名を加え総計卅七名の多数となり、非常な盛会となりました。

支部会則の説明、支部長、副支部長、幹事の選出を行った後、懇親会に移り両先生の久し振りのお話を聞きしたり、先輩後輩との酒酌み交したの懐旧談に楽しい一夜を過ごしました。(宮地幹事記)

(出席者)

- 安藤 昌三 大4 弘田亀之助 大9
岩本 勝弥 大10 土屋 弘成 大12
渡部 兼雄 大12 宮地 冬樹 昭2
北沢 保喜 昭7 公文 幸夫 昭6
中沢 力 昭5 伊藤 努 昭8
片岡 恒 昭7 丸保 一 昭8
小倉 祐三 昭9 藤本 悟郎 昭10
徳岡 毅 昭11 原田 尚文 昭14
中川修一郎 昭15 永野 由二 昭16
平井 滋二 昭23 今村 晶正 昭23

- 土居 正之 正道 23
頼谷 琢雄 森本 俊三 26
野中 広 平田 省三 27
野中 広 講習所並に教室関係

九州支部總會

九州支部では工業教育協会年次大会に御出席の加藤先生その他諸先輩の御来福を機会に若葉萌える五月九日、福岡で支部總會を兼ねて懇親会を行った。

遠く鹿児島・大分方面の会員も参加し、会する者廿三名で、午後六時半より總會を開き高柳支部長の挨拶に続いて、加藤先生から教室の現状をお伺いして、引続き懇親会に移つた。

今回は幸いにも明大の神保成吉先生、愛媛大の弘田亀之助先生、阪大の熊谷三郎先生の諸先輩にも参加して頂くことが出来て、博多情緒の豊かな「水たぎ」に舌鼓を打ちながら夜の更けるのを忘れた。御来賓の諸先生には既に齢五十路過ぎながら益々御健康の御様子で思い出話や、洋行時代の秘話(笑)に花を咲かした。又弘田先生の老いて益々盛んな酒豪振りにには会員一同タジタンの形であつた。

出席者(敬称略)

- 大3 高柳与四郎 大6 金子 義憲
7 加藤 信義 8 神保 成吉
9 弘田亀之助 14 熊谷 俊一
15 宮田 秀介 昭2 河本 三郎
昭4 岡本 賢 昭5 熊谷 勝郎
昭5 松井 貞信 昭11 古池 弘正
11 西村 利夫 昭11 森 恒忠
12 安田振之助 昭12 野田 虎男
16 玉井 寧 昭16 大内田敏行

- 22 久場 義隆 22 深町 藤吉
27 上田 保之 29 佐藤 文紀
(特別参加)
昭大 熊井 潔

十二日会午餐餐会

五月の東京支部総会後、大正年度の合同クラス会を日比谷グランドで開催し鳥養先生、阿部先生、山村幹事も出席、会員は二十名でした。

席上、お互いに年をとつて孫を持つ輪となる旧友が一層懐かしくなるもので今後は再三三合の機会をつくり、ゆつくり懐旧談でもやろうと言ふことに話がきまり、丁度毎月十二日頃には鳥養先生が御上京になるのお話があつたので、十二日を定例午餐日と定めることになりました。

その第一回午餐会を六月十二日午前十一時半より日比谷東光ビル東電技術研究室を拜借して催すこととなり、同時に明治年代の一部の方にも御通知を差上げました処、全員廿七名の出席で、これに鳥養先生、山村幹事も御同席下さいましたことは併せてした。

鳥養先生は明治の卒業生が大正の卒業生かで問題になりましたが、製図だけが大きで、後は明治の卒業生だというお話、明治・大正合同すれば問題もなく今後も毎会御出席下さる由。

通知洩れの方もあろうかと思ひますし、又地方の方で丁度その日に東京に来ておいでの方の御来会を歓迎します。日時・場所に変更の場合もあるかと存じますから御出席下さる方は一応左記へ御連絡下さい。(連絡場所)
有楽町一丁目東光ビル二階
東電技術研究所電20二六五九
並木 氣付

(幹事) 葉 真一 電(99)一八五二

春季定期庭球試合

電気教室対応用科学研究所
かねて負け越しになつていた電気教室は、大久保主任教授引率の下に職員・学生の精鋭をすくつて梅雨晴れの六月十日応研コートに攻め寄せ試合は午後三時より開始された。初めは順調に勝ち進んで大いに気を良くしていた教室軍も老巧山村組に大将服部組が打ち取られるに及んで気を落し、あえなく応研田辺組に滅滅された。

電気教室

- 渡部、村瀬 3-0 岡本、村上
奥村、曾我 3-2 岡本、村上
藤田、松田 3-0 吉田、湯浅
西尾、森山 0-3 田辺、大溝
服部、奥田 2-3 本庄、山崎
岩住、安倍 3-0 山崎、瀨川
森、片山 3-1 山本、西川
渡辺、村瀬 0-3 田辺、大溝
奥村、曾我 2-3 本庄、山本
岩田、安倍 1-2 田辺、大溝
岩住、安倍 3-1 本田、大溝
森、片山 2-3 田辺、大溝
岩住、安倍 1-3 田辺、大溝

東京支部麻雀会

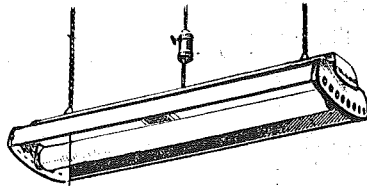
第三回目の麻雀会を六月廿三日(土)に挙行することになり約六十名の会員諸兄に連絡しました。十六名の参加申込みがありました。当日の盛況が予想されましたが、御出張その他の事情で九名に減少したのは残念でした。会場は三菱電機の石川様の御好意によりまして小石川荘をお借り致しました。午後三時頃から十時頃まで四人組と五人組で結局二回戦でしたが、四人組の方は二廻り以上も継続しました。初めは処女の如く上品で

ありましたが、ゲームの進行するにつれて親しみも増し、又アルコールも入つて来ましたので舌の廻転の方が早くなり、宣伝戦が耐となり仲々賑かでありました。成績表(省略)幹事がトップになり怒られました。さ、やかな賞品或は参加賞を頂いて散会しましたが、苦心の策として女性用品も若干入つています。尚お今後の麻雀会に参加希望の方は幹事宛御連絡下さい。(老田)

会費領収(前号続き)

- 昭和卅一年度(第一回)
二九 谷 貞和 久保 淵
島岡洋一郎 白杉 茂
安賀 隆志 森 幹夫
水野 博哉 桑畑 禎文
奥沢 祥弘 福川 幸勇
美原 耕平 北島 利夫
和田 宏 竹田 正董
伊吹 公宏 魚住 孝野
塩田 克弘 安藤 孝野
宮本 一 岩原 皓一
大木 実 山口 保
昭和卅二年度
大二三 河津吉兵衛
一四 正木 昇
昭二 小寺 昇
昭和卅一年度(第二回)
五月十六日より到着の分
七月十日まで
明三五 清水莊一郎 吉田 二郎
三七 中川 憲郎 吉田 未蔵
三九 岡村 金蔵 国友 五郎
四〇 柳瀬 松馬 初見 五郎
四一 小島喜久馬 内田秀四郎
四二 梅田 雄三 川村 公望
四三 河合 賢三 川村 公望
四四 道田 貞治
四五 熊野 貞造 松浦 守一
四六 熊野 徳一 川島栄次郎
四七 中谷 潔

一番自然色に近い



¥ 1,180 より各種

三菱デラックス蛍光ランプを使用した.....

三菱蛍光灯

三菱電機株式会社

| | | | | | | | | | |
|--|--|---|--|--|--|---|--|--|--|
| 一四 | 一三 | 一二 | 一一 | 一〇 | 九 | 八 | 七 | 六 | 五 |
| 相原 侯野 山崎 山上 田中 本多 吉田 松本 庄野 丹波 福島 小内 榊原 山田 池内 西村 関本 榊本 乙葉 辻野 大塚 笠原 石原 | 賀十郎 善雄 松珠 孝登 登雄 吉三 弘 誠一 三 誠三 孝三 誠一 誠三 吉三 次郎 是憲 仙吉 弁造 賢一 義人 真一 秀男 徳雄 冬蔵 重九一 | 木橋 岡田 樋口 高田 芝原 村瀬 泉谷 山元 幸前 林 林 仙石 高見 各務 金子 辻野 光野 七里 | 津本 真吉 市治 豊 兼通 貞吉 邦明 松海 治一 正一 正一 石三 祥平 次郎 義憲 忠夫 重威 義雄 | 越智 松井 永田 足立 石堂 藤田 西田 福井 朝山 占部 岡本 高村 伊達 青井 酒井 野口 青木 吉田 鳥谷 瀬川 鶴岡 後藤 小宮 | 啓富 登兵 良孝 斌陽 一雄 憲真 三 憲三 佐市 宗一 五郎 忠雄 金生 政次 直久 銀次 高太 隆一 健一 二郎 芳雄 義樹 和 | 前萩 萩原 尾形 長安 青柳 吉田 大西 加野 河本 森井 内田 岡野 頓野 安田 浜崎 森田 太田 原戸 歌原 前田 | 憲一 博理 実次 洪二 正一 忠恒 勝兵衛 繁久 佑二 孝夫 英一郎 諒 薫 逸吉 秀介 誠道 安道 | | |
| 七 | 六 | 五 | 四 | 三 | 二 | 一 | 〇 | 九 | 八 |
| 越智 松井 永田 足立 石堂 藤田 西田 福井 朝山 占部 岡本 高村 伊達 青井 酒井 野口 青木 吉田 鳥谷 瀬川 鶴岡 後藤 小宮 | 啓富 登兵 良孝 斌陽 一雄 憲真 三 憲三 佐市 宗一 五郎 忠雄 金生 政次 直久 銀次 高太 隆一 健一 二郎 芳雄 義樹 和 | 前萩 萩原 尾形 長安 青柳 吉田 大西 加野 河本 森井 内田 岡野 頓野 安田 浜崎 森田 太田 原戸 歌原 前田 | 憲一 博理 実次 洪二 正一 忠恒 勝兵衛 繁久 佑二 孝夫 英一郎 諒 薫 逸吉 秀介 誠道 安道 | 憲一 博理 実次 洪二 正一 忠恒 勝兵衛 繁久 佑二 孝夫 英一郎 諒 薫 逸吉 秀介 誠道 安道 | 憲一 博理 実次 洪二 正一 忠恒 勝兵衛 繁久 佑二 孝夫 英一郎 諒 薫 逸吉 秀介 誠道 安道 | 憲一 博理 実次 洪二 正一 忠恒 勝兵衛 繁久 佑二 孝夫 英一郎 諒 薫 逸吉 秀介 誠道 安道 | 憲一 博理 実次 洪二 正一 忠恒 勝兵衛 繁久 佑二 孝夫 英一郎 諒 薫 逸吉 秀介 誠道 安道 | 憲一 博理 実次 洪二 正一 忠恒 勝兵衛 繁久 佑二 孝夫 英一郎 諒 薫 逸吉 秀介 誠道 安道 | 憲一 博理 実次 洪二 正一 忠恒 勝兵衛 繁久 佑二 孝夫 英一郎 諒 薫 逸吉 秀介 誠道 安道 |

| | | | | | | | | | | | |
|--|---|--|--|---|--|---|--|---|--|---|----|
| 一八 | 一七 | 一六 | 一五 | 一四 | 一三 | 一二 | 一一 | 一〇 | 九 | 八 | |
| 山本 植谷 糟井 中沢 高橋 尾須 河内 則神 大隈 小川 松野 堀野 田中 伊達 泉山 伊藤 倉内 平野 辻野 河野 天野 清水 大森 綿谷 中山 榊本 中堀 北村 高橋 仁村 藤原 大塚 丸塚 大場 高尾 和国 | 政比 眞古 篤夫 清磨 眞修 二安 一茂 淳辰 光武 利茂 直美 眞幸 哲郎 怨一 英治 慶男 幸正 藤吉 高義 秀明 治郎 武司 正義 健一 悟郎 孝志 芳雄 光吉 孝三 一恭 重遠 保三 俊夫 昌博 眞三 | 荷口 藤安 鍛冶 影山 森大 前坪 吉田 北板 肥倉 山本 三上 山本 加藤 服部 近藤 平田 今井 吉川 鈴木 古池 前田 毛田 佐藤 塩沢 森田 吉田 松井 竹中 塩見 片岡 五十嵐 宮本 石川 | 一郎 亮敬 幸雄 盛行 政太 眞太郎 大内 眞太郎 前田 藤治 坪井 直浩 吉田 直隆 北川 章保 板倉 清大 肥後 大保 山本 達三 村上 三 山本 健 加藤 俊一 服部 行章 近藤 久治 平田 宰造 今井 正善 吉川 徳夫 鈴木 弘冽 古池 弘正 前田 道生 毛田 正雄 佐藤 一保 塩沢 武弘 森田 辰彦 吉田 茂彦 松井 辰彦 竹中 哲哉 塩見 武夫 片岡 武夫 五十嵐 眞恒 宮本 政幸 石川 弘清 | 山本 植谷 糟井 中沢 高橋 尾須 河内 則神 大隈 小川 松野 堀野 田中 伊达 泉山 伊藤 倉内 平野 辻野 河野 天野 清水 大森 綿谷 中山 榊本 中堀 北村 高橋 仁村 藤原 大塚 丸塚 大場 高尾 和国 | 政比 眞古 篤夫 清磨 眞修 二安 一茂 淳辰 光武 利茂 直美 眞幸 哲郎 怨一 英治 慶男 幸正 藤吉 高義 秀明 治郎 武司 正義 健一 悟郎 孝志 芳雄 光吉 孝三 一恭 重遠 保三 俊夫 昌博 眞三 | 荷口 藤安 鍛冶 影山 森大 前坪 吉田 北板 肥倉 山本 三上 山本 加藤 服部 近藤 平田 今井 吉川 鈴木 古池 前田 毛田 佐藤 塩沢 森田 吉田 松井 竹中 塩見 片岡 五十嵐 宮本 石川 | 一郎 亮敬 幸雄 盛行 政太 眞太郎 大内 眞太郎 前田 藤治 坪井 直浩 吉田 直隆 北川 章保 板倉 清大 肥後 大保 山本 達三 村上 三 山本 健 加藤 俊一 服部 行章 近藤 久治 平田 宰造 今井 正善 吉川 徳夫 鈴木 弘冽 古池 弘正 前田 道生 毛田 正雄 佐藤 一保 塩沢 武弘 森田 辰彦 吉田 茂彦 松井 辰彦 竹中 哲哉 塩見 武夫 片岡 武夫 五十嵐 眞恒 宮本 政幸 石川 弘清 | 山本 植谷 糟井 中沢 高橋 尾須 河内 則神 大隈 小川 松野 堀野 田中 伊达 泉山 伊藤 倉内 平野 辻野 河野 天野 清水 大森 綿谷 中山 榊本 中堀 北村 高橋 仁村 藤原 大塚 丸塚 大場 高尾 和国 | 政比 眞古 篤夫 清磨 眞修 二安 一茂 淳辰 光武 利茂 直美 眞幸 哲郎 怨一 英治 慶男 幸正 藤吉 高義 秀明 治郎 武司 正義 健一 悟郎 孝志 芳雄 光吉 孝三 一恭 重遠 保三 俊夫 昌博 眞三 | 荷口 藤安 鍛冶 影山 森大 前坪 吉田 北板 肥倉 山本 三上 山本 加藤 服部 近藤 平田 今井 吉川 鈴木 古池 前田 毛田 佐藤 塩沢 森田 吉田 松井 竹中 塩見 片岡 五十嵐 宮本 石川 | |
| 二九 | 二八 | 二八 | 二七 | 二六 | 二五 | 二四 | 二三 | 二三 | 二二 | 二〇 | 一九 |
| 山久 岩下 花井 眞野 山本 小川 久保 根来 塩谷 堀謙 原岡 北尾 安岡 平川 藤島 大門 中野 加藤 野村 岡田 細野 桑津 木村 清水 神水 榊田 兼松 兼松 松本 広本 小菅 池田 上野 水野 清水 大島 木村 守分 藤井 | 宏男 宏 助 充夫 政三 健夫 良一 昭二 惠三 戎三 謙二 房健 孝也 幸義 四徹 清二 普雄 哲夫 圭司 精二 美二 寛勝 周秀 道義 恒男 照久 尚通 兼亮 正馨 忠幸 方孝 春洋 幸彦 敏行 勝巳 通重 大井 川幸 木村 幸太郎 井上 孝三 岩野 潤三 荒木 潤三 井上 孝文 山本 茂樹 島 陽一 | 田塩 伊藤 大西 山本 中山 丸林 宇遠 遠藤 猪林 津川 山中 大倉 中尾 梅原 萩原 佐溝 林保 椿谷 細包 松村 頼谷 鈴木 西村 土井 太田 松本 信沢 岩本 深谷 吉池 小宮 田中 山口 永川 京極 中川 内山 | 一郎 亮敬 幸雄 盛行 政太 眞太郎 大内 眞太郎 前田 藤治 坪井 直浩 吉田 直隆 北川 章保 板倉 清大 肥後 大保 山本 达三 村上 三 山本 健 加藤 俊一 服部 行章 近藤 久治 平田 宰造 今井 正善 吉川 徳夫 鈴木 弘冽 古池 弘正 前田 道生 毛田 正雄 佐藤 一保 塩沢 武弘 森田 辰彦 吉田 茂彦 松井 辰彦 竹中 哲哉 塩見 武夫 片岡 武夫 五十嵐 眞恒 宮本 政幸 石川 弘清 | 山本 植谷 糟井 中沢 高橋 尾須 河内 则神 大隈 小川 松野 堀野 田中 伊达 泉山 伊藤 倉内 平野 辻野 河野 天野 清水 大森 綿谷 中山 榊本 中堀 北村 高橋 仁村 藤原 大塚 丸塚 大場 高尾 和国 | 政比 眞古 篤夫 清磨 眞修 二安 一茂 淳辰 光武 利茂 直美 眞幸 哲郎 怨一 英治 慶男 幸正 藤吉 高義 秀明 治郎 武司 正義 健一 悟郎 孝志 芳雄 光吉 孝三 一恭 重遠 保三 俊夫 昌博 眞三 | 荷口 藤安 鍛冶 影山 森大 前坪 吉田 北板 肥倉 山本 三上 山本 加藤 服部 近藤 平田 今井 吉川 鈴木 古池 前田 毛田 佐藤 塩沢 森田 吉田 松井 竹中 塩见 片岡 五十嵐 宫本 石川 | 一郎 亮敬 幸雄 盛行 政太 眞太郎 大内 眞太郎 前田 藤治 坪井 直浩 吉田 直隆 北川 章保 板倉 清大 肥后 大保 山本 达三 村上 三 山本 健 加藤 俊一 服部 行章 近藤 久治 平田 宰造 今井 正善 吉川 徳夫 铃木 弘冽 古池 弘正 前田 道生 毛田 正雄 佐藤 一保 塩沢 武弘 森田 辰彦 吉田 茂彦 松井 辰彦 竹中 哲哉 塩见 武夫 片岡 武夫 五十嵐 眞恒 宫本 政幸 石川 弘清 | 山本 植谷 糟井 中沢 高橋 尾须 河内 则神 大隈 小川 松野 堀野 田中 伊达 泉山 伊藤 倉内 平野 辻野 河野 天野 清水 大森 绵谷 中山 榊本 中堀 北村 高橋 仁村 藤原 大塚 丸塚 大场 高尾 和国 | 政比 眞古 篤夫 清磨 眞修 二安 一茂 淳辰 光武 利茂 直美 眞幸 哲郎 怨一 英治 庆男 幸正 藤吉 高义 秀明 治郎 武司 正义 健一 悟郎 孝志 芳雄 光吉 孝三 一恭 重远 保三 俊夫 昌博 眞三 | 荷口 藤安 锻冶 影山 森大 前坪 吉田 北板 肥仓 山本 三上 山本 加藤 服部 近藤 平田 今井 吉川 铃木 古池 前田 毛田 佐藤 塩沢 森田 吉田 松井 竹中 塩见 片冈 五十岚 宫本 石川 | |

| | | | | | | | | | | | |
|---|--|--------------------------------|---------------|----------------|---------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 二二 | 二二 | 二二 | 二二 | 二二 | 二二 | 二二 | 二二 | 二二 | 二二 | 二二 | 二二 |
| 丸野 塩谷 岡谷 安岡 毛橋 摺谷 中根 加入 岩野 服部 河野 片岡 大場 松原 歌山 熊野 寺野 高橋 | 宏一元 三義 幸清 保明 義明 義良 義美 直明 行章 美明 俊三 誠一 直樹 誠次 德一 富次 | 島原 国枝 山田 松尾 濱田 永村 泉山 越智 五十嵐 啓富 | 昭和三十二年度 (第八回) | 昭和三十九年度 (第十四回) | 昭和廿九年度 (第十四回) | 昭和廿八年度 | 昭和廿七年度 | 昭和廿六年度 | 昭和廿五年度 | 昭和廿四年度 | 昭和廿三年度 |
| 丸野 塩谷 岡谷 安岡 毛橋 摺谷 中根 加入 岩野 服部 河野 片岡 大場 松原 歌山 熊野 寺野 高橋 | 宏一元 三義 幸清 保明 義明 義良 義美 直明 行章 美明 俊三 誠一 直樹 誠次 德一 富次 | 島原 国枝 山田 松尾 濱田 永村 泉山 越智 五十嵐 啓富 | 昭和三十二年度 (第八回) | 昭和三十九年度 (第十四回) | 昭和廿九年度 (第十四回) | 昭和廿八年度 | 昭和廿七年度 | 昭和廿六年度 | 昭和廿五年度 | 昭和廿四年度 | 昭和廿三年度 |
| 丸野 塩谷 岡谷 安岡 毛橋 摺谷 中根 加入 岩野 服部 河野 片岡 大場 松原 歌山 熊野 寺野 高橋 | 宏一元 三義 幸清 保明 義明 義良 義美 直明 行章 美明 俊三 誠一 直樹 誠次 德一 富次 | 島原 国枝 山田 松尾 濱田 永村 泉山 越智 五十嵐 啓富 | 昭和三十二年度 (第八回) | 昭和三十九年度 (第十四回) | 昭和廿九年度 (第十四回) | 昭和廿八年度 | 昭和廿七年度 | 昭和廿六年度 | 昭和廿五年度 | 昭和廿四年度 | 昭和廿三年度 |